



芸術文化振興基金助成事業

平成29年度 高校音楽教室



2017年

5月15日 [月] 14:00 県立中央中等教育学校・県立盲学校
昌賢学園まえばしホール（前橋市民文化会館）

5月16日 [火] 14:00 県立太田工業高等学校
大泉町文化むら

5月17日 [水] 14:00 県立桐生南高等学校
笠懸野文化ホール



群馬県教育委員会
(公財)群馬交響楽団

PROGRAM

格林カ／歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲
モーツァルト／ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K.466
～休憩～
ベートーヴェン／交響曲 第5番 ハ短調 作品67「運命」

指揮：柴田 真郁 ピアノ：高木 竜馬



©ai ueda

しばた まいく
指揮：柴田 真郁

1978年東京生まれ。国立音楽大学声楽科を卒業後、合唱指揮やアシスタント指揮者として藤原歌劇団、東京室内歌劇場等で研鑽を積む。2003年に渡欧、ドイツ各地の劇場、オーケストラで研鑽を積みながら、04年にウィーン国立音楽大学マスターコースでディプロムを取得。ブラハ室内管弦楽団、ベルリン室内管弦楽団等に客演する。また、リセウ大歌劇場のアシスタント指揮者オーディションに合格し、ヴァイグレ、ロス＝マルバ氏等のアシスタントとして活躍する。帰国後は主にオペラ指揮者として活動し、池辺晋一郎「死神」、ヴェルディ「仮面舞踏会」、プッチーニ「トスカ」等を指揮、好評を博す。近年では管弦楽にも力を入れており、これまでに、日本フィル、東京フィル、神奈川フィル、東京ニューシティ管、日本センチュリー響、大阪響等と共演。

指揮を十東尚宏、星出豊、ティロ・レーマン、サルバドル・マス・コンデに師事。2010年五島記念文化財団オペラ新人賞（指揮）受賞。

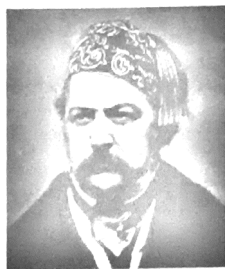


たかぎ りょうま
ピアノ：高木 竜馬

1992年千葉生まれ。渋谷教育学園幕張高校在学中にウィーン国立音楽大学に首席合格。現在ウィーン国立音楽大学とイモラ国際ピアノアカデミーを併修し、ミヒヤエル・クリスト、ボリス・ペトルシャンスキー各氏に師事。第26回ローマ国際ピアノコンクールでの優勝の他に、5つの国際コンクールで優勝。本年度は3月に行われたウィーン楽友協会大ホールでのコンサートの他に、ヨーロッパ各地や日本で60回以上の演奏を予定している。これまでに群馬交響楽団、東京交響楽団、千葉交響楽団、東京フィル、ロシアヤロスラブリ交響楽団、ウクライナ国立フィル、ウィーン室内管弦楽団、等と共演。TV『題名のない音楽会』NHK-FM『リサイタル・ノヴァ』『オーストリア国营放送』『イタリア国营放送』等に出演。

PROGRAM NOTES

■歌劇《ルスランとリュドミラ》序曲…ミハイル・格林カ



19世紀前半までのロシアでは、イタリア、フランス、ドイツなどの諸外国の音楽が中心的役割を担っていました。多くの国外の音楽家がロシア宮廷に招かれて、活躍した一方で、ロシア人のプロの音楽家はあまり育ちませんでした。裕福な家庭に生まれ、貴族の寄宿学校に通った格林カ（1804-57）も、当初は運輸省に勤めながら音楽活動をしていました。やがて1828年に官吏を辞めて、作曲に専念する道を選びます。1830-34年にはイタリア、ドイツで研鑽を積み、帰国後は、ロシア的な音楽の創作に向かいました。折しも1830-40年代のロシアでは、国民主義の機運が高まりを見せており、格林カ自身もイタリア留学中に、祖国への郷愁からロシア的な作品を書きたいと思うようになったと述べています。ロシアに題材を採った彼の歌劇《イヴァン・スサーニン（皇帝に捧げた命）》こそ、最初のロシア国民歌劇と言っていいでしょう。初演が行なわれた1836年12月9日は、ロシアの古典音楽

が始まった日とされています。

《ルスランとリュドミラ》は、格林カが完成させたふたつめの歌劇。悪魔にさらわれた娘リュドミラを求婚者ルスランが救い出すというメルヒェン・オペラとも言える内容です。ロシア近代文学の祖プーシキン(1799-1837)の叙事詩をもとにしています。格林カは、この偉大なる詩人と親交があり、彼と直接の打ち合わせもしました(しかしプーシキンは、美貌の妻を守るために1837年に決闘で亡くなってしまいます)。歌劇の初演は、《イヴァン・スサーニン》のちょうど6年後の1842年12月9日にペテルブルクで行なわれましたが、不評に終り、格林カは一時的に祖国をあとにして、パリ、スペインへと旅立ったのでした。没後、この作品への評価は高まり、現在では格林カの代表作に数えられており、とくに序曲はしばしば独立して演奏されます。歌劇本編の主題を使ったソナタ形式で書かれ(簡単に言えば、最初に現われる主題が展開されたあと、再びもどってくる形式です)、最初から最後までたたみかけるような速度で演奏されます。この作品は和声的にも革新的で、初めて全音階が使われた作品としても一般に知られており、序曲の最後にもそれは下行音型として現れます。

■ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K.466…ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト



モーツァルト(1756-91)のクラヴィーア[ピアノ]協奏曲は27曲に番号が付けられていますが、真作は23曲で、そのうちの17曲がウィーン時代の作品です。当時の演奏会における大きな呼び物のひとつが、独奏者の華々しい名人芸をみせる協奏曲でした。ウィーンの人々は、モーツァルトの協奏曲に夢中になり、当地での彼の人気は高まっていったのです。実際、独奏協奏曲ではソリストが主役であり、ソロが活躍する箇所では管弦楽は伴奏です。曲も交響曲のように主題労作を重視するというよりも、華やかなパッセージに耳目が集まるように作られています。

1785年以降にモーツァルトが作曲した、最後の8曲のピアノ協奏曲は、楽器編成の拡大による交響的な様式と親しみやすい主題に特徴があり、その充実した内容ゆえに不朽の名作として高く評価されています。その8曲の最初を飾る作品が、1785年に完成されたこの第20番です。同年2月11日の演奏会のために作曲され、その初演に際し、臨席した皇帝ヨーゼフ2世(在位1765-90)やハイドン(1732-1809)が絶賛した様子を、父レオポルト(1719-87)が書き残しています。同時期に書かれた、優雅なイ長調の協奏曲(K.488)などとは異なり、この曲は、華やかさが求められた当時の協奏曲としては異例とも言える激しい性格の音楽です。そのため19世紀のロマン主義の時代にも根強い人気がありました。その一方で穏やかさも感じられ、ふたつの性格の強烈な対照が印象的です。なお、モーツァルト自身によるカデンツァは現存していません。

第1楽章 アレグロ 二短調 協奏風ソナタ形式

第1主題の緊迫した構成は実に見事です。この主題は、基本的に管弦楽のトゥッティで奏され、ここにバロック時代のリトルネッロの名残を認めることができるでしょう。ピアノ・ソロの導入部で奏される新主題が、展開部で扱われていきます。

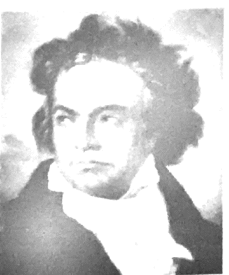
第2楽章 ロマンズ 変口長調 三部形式

優しく穏やかな主部と、緊迫感のあるト短調の中間部との対比が素晴らしい効果を上げています。

第3楽章 アレグロ・アッサイ 二短調

緊張感に満ちた出だしは、第2主題が現れると明るい性格のヘ長調となります。展開部のないまま再現部となり、カデンツァへと続きます。最後は、比較的長いニ長調のコーダによって、華やかに閉じられます。

■交響曲 第5番 ハ短調 作品67「運命」…ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン



タタターン。この出だしは、とてもよく知られています。ベートーヴェンの傑作は数多くありますが、この曲ほど有名な作品はないでしょう。作曲は、今から200年以上前の1807-08年です。

ウィーンで早々と名声をつかんだベートーヴェンですが、1790年代の終わり頃から耳の疾患に苦しめられるようになり、1802年には有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」を書き残します。これは、難聴への絶望と諦めから自殺を決めたという内容ではなく、むしろ、そうした困難を乗り越えようという、彼の決意表明です。「ただ私の芸術



だけが私を引き止めた。ああ、私は、自分のなかにあると感じているものすべてを生み出すまでは、この世を去ることはできないと思った」(バリー・クーパー『ベートーヴェン大事典』平凡社から)。そして実際、この時から、彼の作風は力強いものへと変化していくのです。我々が一般に抱いているベートーヴェンのイメージは、1802年からの約10年間にみられるこの力強い作風に大きく依存していると言ってよいでしょう。

さて、この交響曲第5番ですが、有名な冒頭について、ベートーヴェンが弟子のシントラー(1798-1864)に「運命はこのように扉をたたく」と語ったと伝えられているために、一般に《運命》と呼ばれています。しかし、その真偽ははっきりしていませんし、ベートーヴェン自身が「運命」というタイトルをつけた訳でもありません。したがって、この曲が何かの「運命」と関連があるとは言いきれません。それよりも重要なことは、作品全体の構成にあります。つまり、タタターンという冒頭のリズム・パターンがすべての楽章に形を変えて出てくることによって、曲全体の統一を図っているのです。これほど徹底した例は、《運命》以前にはありませんでした。このようにベートーヴェンの作品は、多くの新しい工夫に満ちており、だからこそ彼の音楽は、のちの音楽家に大きな影響を与えることになったのです。まさに、18世紀前半から展開してきた古典派を頂点に導き、続くロマン派への橋渡しをした作曲家と言えます。強烈なオリジナリティと才能に裏打ちされた創意工夫、そして難聴を克服して作り続けた、力強くも温かい音楽にこそ、彼の音楽の真骨頂があると言えるでしょう。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ ハ短調

冒頭の有名な力強い旋律と「タタターン」というリズム・パターンに注目です。この旋律は徹底的に展開(変化)される一方で、リズム・パターンは変えられることなく、執拗に用いられています。ソナタ形式。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 変イ長調

穏やかで泰然とした2つの主題が自由に変奏されます。つまり、A-B-A'-B'-A"-B"-A"-B"-コーダ(終結部)という変則的な変奏曲の構成です。Bのリズムが第1楽章冒頭と同じリズム・パターンです。

第3楽章 スケルツォ、アレグロ ハ短調

おどけたなかにも激しさを感じさせるスケルツォ。ホルンに例のリズムがはっきりと力強く現れます。軽快なフーガになっていますが、ベルリオーズ(1803-69)はこの部分を「浮かれた象が踊っているようだ」と評しました。最後は力を溜めて、途切れることなく一気に終楽章へとなだれ込みます。三部形式。

第4楽章 アレグロ ハ長調

強いエネルギーをもって勢いよく始まります(第1主題)。続いて現れる第2主題は、例のリズム・パターンです。クライマックスを過ぎると、第3楽章でホルンが吹いたリズムが現れ、第1主題が再現され、最後は華やかにそして堂々と曲を閉じます。ソナタ形式。

福田 弥(ふくだ わたる)
慶應義塾大学准教授。音楽学(フランツ・リスト研究)

お願い 演奏をお楽しみいただくために



電源OFF

携帯電話や時計のアラーム等は必ず電源をお切りください。



撮影禁止

会場内での写真撮影・録音・録画は禁止されています。



声に注意

演奏中のおしゃべりは厳禁です。小声でも周りの方に聞こえます。咳などにもご注意ください。



物音に注意

持ち物を移動させる時の音など意外に気になります。補聴器をお使いの方は設定のご確認を。



飲食禁止

客席内での飲食は禁止されています。ロビーをご活用ください。

公益財団法人 群馬交響楽団

事務局 〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1
TEL (027) 322-4316 (代)
<http://gunkyo.com/>

群響

検索

群馬交響楽団 Gunma Symphony Orchestra

1945年戦後の荒廃の中で文化を通じた復興を目指して創立、1955年「群響」をモデルに制作された映画「ここに泉あり」が公開され、全国的に注目を集めた。1947年から始めた移動音楽教室は、2016年度までに延べ630万人を超える児童・生徒が鑑賞した。2014年6月には定期演奏会が500回に達し、2015年11月には創立70周年を迎えた。群馬交響楽団は群馬県の文化の象徴として県民から幅広く支持されている。